JAPAN GET-ACQUAINTED PROGRAM

NEWS LETTER NO. 1

September, 1961

Editor
Hachiro Kubota

近頃CBAがしきりにアダムスキを攻撃し、機関誌中のアダムスキに関する記事はことごとく皮肉な調子で書かれてあって、「この際やっつけてしまえ」といったような分裂感情が溢れているのを感じます。これは或る方面から出た怪情報、すなわちアダムスキは悪の手先であるという説をCBA幹部が信じたからであり、そして私までをブラックだと云いだしたのは私がアダムスキを支持しているからというよりもむしろ個人感情がたぶんにからんでいるからと思われます。私に云わせればこれらは誤解以外の何物でもなく彼らの自己拡張の心のあらわれであるとしか思えませんが、しかしまじめに考えようとされる人が非常な懐疑におちいって、その結果円盤問題に関する興味をも失うようになられるのは残念でありますので、ここにいささか新しい情報を提供し、私の考えをつけ加えてご参考に供したいと存じます。

×　×

ジョージ・アダムスキは悪の手先ではないと私自身思います。私の感ずるところではクリシュナムルティー氏に匹敵するほどの、おそらく今世紀最大の偉人群の一人であると思われます。そしてそのことがみとめられるのは彼の死後、地球のロケットが太陽系の諸遊星へいんぱんに着陸するようになってからだろうと思います。これは一冊や二冊の書物を読んだだけで判断したことではなくて、彼から直送される書簡類や各国の研究団体から来た厖大な情報類を調査研究した結果、確信をもつようになったのでありまして、たんなる盲信ではないつもりです。

私と同様に各国の研究家が彼を偉大だとみなす理由は、彼の異常な体験よりもむしろ彼の思想に価値をみとめているからです。その価値は時代の進歩とともに精神科学、特にテレパシーの研究熱がたかまってくることによって認められるようになるでしょう。しかしそれはほど遠いことです。

およそアダムスキほどに世界中から非難と嘲笑を

浴びた人はいないでしょうが、また彼ほどに他を攻撃しない人もありません。彼はだいぶ前から Get Acquainted Program（略称G・A・P。知り合いになる運動）という組織をもちましたが、これは、他の進化した遊星では誰もがみな知り合いであって未知の人というのはいないにもかかわらず、この地球では未知の人があまりに多いために不和や闘争が生じるので、我々はなるべく多くの人と知り合いになり友達になるほうがよいという趣旨のもとにつくられたもので、現在は十七ヵ国の研究家がこの組織網に加わっていて、各自が研究グループをもち、定期的に情報を交換し合っています。そしてアダムスキを最も強く支持している円盤研究団体は、最高の円盤研究誌として知られる英国の「空飛ぶ円盤評論（フライング・ソーサー・レビュー）」誌の編集陣です。ここの編集顧問であるJ・M・レイド氏はかつてG・A・Pの英国代表者でした。この研究誌は現在まで一貫してアダムスキの撮影した円盤写真だけを十枚一組で（ただしその内一枚だけはオーガスト・ロバート氏の撮ったもの）希望者に頒布しておりまして、CBAがそうように「アダムスキの撮った写真のすべては模型を写したのであるというのが世界の定説である」という説明がそらそらしいウソであることがわかります。模型を写したような写真を「空飛ぶ円盤評論」誌ともあろうものが頒布するわけがありません。かつてCBAの幹部として働いた私は幹部連の粗雑な言動に悩まされたものでしたが、このことは詳述を避けることにしましょう。

今春の或る日、アダムスキから長文の書簡を受けとって一読した私は、これがCBAのコンタクト・ケースを支持することを意味するものであると感違いして、早速その旨を某幹部宛に知らせましたが、そのことがそもそもの間違いでした。アダムスキはCBAのコンタクトを決して認めていなかったことがのちに判明したのです。しかしその頃はまだ私も松村氏の体験の真実性を信じていて、五月三日に福

岡で講演を行なったあとのディナーのときにもそのことを話した記憶があります。それより少し前に私は小川氏宛に親展状を出し、CBAのやり方がよくないために会員間に非難の声があるのでもっとしっかりやろうではありませんか、といった意味の一種の檄文を送ったのですが、これは当時小川氏が編集上で相当な発言力をもっておられるのだろうと考えたからでした。そして非難の声があったのも事実で、たとえばCBAでは原稿を書きもしないうちから書籍の広告を出して金だけを先取りするといったやり方や、厖大な寄付金を乱費しているとかいう噂は相当に地方の会員も知っていたのです。その頃小川氏がボードを信じておられたことを全然知らなかった私は氏の好意ある返事を期待していたのですが、この親展状がどうしたわけか松村氏にまわされたのです。そして私までが小川氏と組んでボード事件の一味となって策動していると誤解された松村氏は、突然私宛に速達で激怒の手紙をよこされました。それはまるで脅迫状であり、血迷った恐ろしい文面の手紙で私はそれを読んだ日は恐怖でメシが喉に通らなかったほどです。つまり、速刻上京して意見を開陳せよ、来なければおまえの責任問題にまで発展させてやる、といった意味のことが自筆で書かれてあったのです。氏が激怒しやすい性格の人であることはかねてから知っていましたが、それは純真さのしからしむるところだろうと善意に解釈していました。しかしどうもこの解釈はあたっていなかったようです。それよりも私が実に不思議に思ったのは、氏のように感情を抑制することのできない人が地球人の代表としてよくもコンタクトマンに選ばれたものだということです。そして氏がコンタクトしていると称する「宇宙人」なるものの正体について深く考えざるを得なくなってきました。そういえば、大変災発生の予告とそれに関連したさまざまのおそろしく馬鹿げた計画や活動など疑惑のフシが多くあり、その「正体」について私は私なりの臆測をもっていま

すけれどもここでは省略することに致します。

ところでアダムスキの秘書であったルーシー・マクギニス女史は世界中の円盤問題を調査してきた人であり、いわば各国のコンタクト・ケース解明の或るカギを握る人物であると思われますので、七月二十一日付をもって私は女史宛に長文の質問状を出してみました。この人は思想的にも気高くて、まれにみる賢明な婦人であると私は思っておりますし、その情報は一読の価値があると考えています。その回答が来る前に同女史から七月十二日付で長文の書簡が来ましたが、これはアダムスキ一家が財政難からパローマーの財産を売却して他の町へ五月に移動したことと、それを機会に女史も社会保障の資格を得るためにアダムスキのもとを離れたことを報じたものです。この文面で女史の考え方が、或る程度わかりますので、重要な個所を次に抜粋してみましょう。

× ×

『しばらくのあいだ私はアダムスキ（または他の誰か）の印象に私の印象を従わせるよりもむしろ私自身の印象に従うことのできる道を見出さねばならないという感じをもっていました。彼のために私はずいぶん長いあいだ働いてきたのです。彼に会った人のなかには彼がきわめて支配的な個性の人物であることを知っています。もしあなたが私を知ったならば、私もまた同じような性質であることに気づくでしょう。しかし、働き手（ワーカー）は指導者（リーダー）の命令に従うべきものであると私はいつも考えていました。プログラムは宇宙人のそれであって、世界中の人々に知識をわかつためにアダムスキによって指導されていました。このために私はアダムスキの印象に私自身の印象を従わせたのです。もっとも私は、自己成長における最も重要な要素の一つは自分自身の印象を認めてそれに従うことを学ぶことであると多くの手紙で書きましたけれども――。こんなふうにしてこそ人は望ましい考えから真実の印象を区別することを学ぶのです。どうぞご理解下さい』

『一九五九年にアダムスキが海外から帰ったのち、彼と私が交した或る会話のあいだで彼は云いました。

《ルーシー、一体どうすればあなたは自分自身を助けることができないときに他人を助けることができると考えるか？》 私はこれがすばらしい質問であると思い、ただちに解答を求め始めました。この質問は私がなそうとしていたあらゆることに一つの新しい視野を与えたのです』

『長いあいだ私はアダムスキからずいぶん多くを学んできました。私はこの知識を皆さんがなしているのと同じような無味乾燥な世の中の仕事に応用しなければなりません』

『彼との訣別は長いあいだ私が説いてきたことを実行するようにと私の内奥で せきたてる力によるのにすぎないということをどうぞ理解して下さい。私が彼と共にいた長いあいだの彼の体験、すなわち〝実見記〟や〝回顧記〟や私たちの無数の手紙のなかで述べられた体験は、私が生きる限り支持するつもりです。私は彼の最初のコンタクトの目撃者であったことをお忘れにならないように。私たちは真実であることを知っている物事を決して否定はできないのです。私はこの〝知識〟を基礎づける証拠をもちませんが、他の力をもってしてもゆすぶることは決してできないという内奥の確信をもっております。それとは反対の報告もあるでしょうが、しかし私からの報告を事実として考えて下さい。過去には誤った報告もありました。私たちはこれをどうしようもありません。私たちは真実であると知っている物事にたいして真実であり得るだけです』

『ずっと以前に、それのために私たちが集められた物事を私たちは完成したと思います。それのために私たちが存在せしめられたところの〝父〟の意志を遂行するために新しい道が今開かれています。私の祈りはすなわち、私たちは勇敢に賢明に前進しよう、そして私たちのすべてが受けついでいて、しかもその力においてはきわめて破壊的なあの個性という特

性から自分たちを自由にしよう、ということにあります』

×　　×

次に前述の七月二十一日付の私の質問状にたいするマクギニス女史の回答をかかげることにします。これは八月十五日付の航空書簡でよこされたもので、ここでは最初の十行ばかりを省略します。

×　　×

『《問》ジョージ・アダムスキはどんな人ですか？私（註、久保田）はいつもアダムスキを私の理想としてきました。彼は聖フランシスのような人ですか、それともハイド氏のような人ですか？　あなたは彼を聖人だと思いますか？

《答》アダムスキは聖人ではありません！　彼は人生の行路を歩みながら偉大な知恵と理解力とを身につけたきわめて力強い人です。また彼は数多くの体験をも積んできましたが、同胞を援助するためにその体験を世界に知らせました。そうすることによって彼は古い束縛された諸理論のために役立ち、人類をこの小さな遊星に閉じこめたきずなを開放し、より大きな興味ある生活と、彼がもとは何もない空間だと考えていた宇宙への旅にたいする希望を人類に与えました。彼は正式な教育をほとんど受けていませんが、偉大な勇気をもっていて、そのために教育のある人々があえて試みようとしなかった物事を成就することができたのです。

《問　二》彼は大酒飲みだと云われていますが、それはほんとうですか？（註、CBAの"円盤ニュース"にそのような記事が出たので、この質問を出した）

《答》彼は大酒飲みではありません。ときどき社交上飲むことがありますが、しかし大抵の人は、特に米国ではそれをやります。私はそんなことが人間の欠点になるとは思いませんし、あなたもきっと思わないでしょう。

《問　三》ご存知のようにこの国には松村雄亮という有名なコンタクトマンがいて、彼は一九五九年の夏以来、他の遊星から来た宇宙人とコンタクトを続けていると称しています。しかし私の考えでは、この

宇宙人たちはアダムスキの宇宙の友人たちとは異なるようです。アダムスキはこの事実を認めましたか？　松村氏の体験はアダムスキの体験と関係がありますか？　それとも多くの異なる宇宙人がこの地球へ来つつあるのですか？

《答》もし松村氏が実際に肉体をもつ宇宙人とコンタクトしているとすれば、たぶんそれはアダムスキが会った如何なる宇宙人とも全然異なるようです。私たちのこの太陽系内の隣人たちの行為とは全く違った行為をするように思われるその種類の訪問者については私は全然知りません。彼らが松村氏に一方的にテレパシーの能力を与え、彼の生命を危険におとしいれるようなことを仕向けるということにたいし（註、この事については別に詳報を送った）、彼らがこの地球の人間であろうと他の遊星から来たのであろうと、私なら彼にたいしてその宇宙人なるものに警戒せよと忠告したいところです。私がこれまでに知り得た限りでは、それが他の遊星人であるということは疑わしいようですし、また土星とは全く関係がありません（註、松村氏が土星に着陸したという話を知らせたことに関する記事）。アダムスキは多数の土星人と会いましたが、彼らの誰も他人に一方的に想念を押しつけるようなことは全然しないということです。私たちは誰もが自分で食物を食べ、自分で生長し、そして自分で学ばねばならないのと同様に、私たちは〝無限者〟の意志を行なおうとするならば、自分で考え、自分で自己の内奥の導きの手に気づいてそれに従うようにして、自分自身の生命の主人にならねばならない、ということを彼ら宇宙人は知っているのです。

《問四》ジョージ・ウィリアムスンについて、あなたはどう考えますか？　彼はきわめて知性的で宗教的感性の高い人であるとよく云われています。もちろん私は彼が約十年前にデザート・センターにおける六人の目撃者の一人であったことを知っています。しかし彼はあまりに独断的であって真理の探求者と

はいえないようです。彼の数々の著書はUFO研究書のなかで最もわけのわからぬものであり、特に〝ライオンの隠れ家〟に至っては尚更です。彼の著書である〝宇宙語ー宇宙人〟をあなたはどう思いますか？ 同書に掲載されている例の〝足跡〟の解読をあなたはナンセンスだとは思いませんか？

《答》 ジョージ・ウィリアムスンは心霊の分野に入ってしまいました 私はそれを支持しません。彼はそれに入る前にこの分野の知識をもちませんでした。私の意見では、盲目的にそのような事をせんさくするのはきわめて危険です。人類学者としてウィリアムスンはすぐれているかもしれませんが、それは私にはわかりません。彼は今、南米での科学的探険に関する調査を行なっているということですが、私がこれまでに行なった種々の調査によって知り得た限りでは、彼の宇宙人に関する発表で私が聞いたことはすべて真実ではありません。私は彼の著書をあまり読む暇がありませんでした。これはその著書から受ける感じが読書に時間をかけようという気持を起させなかったからです。〝足跡〟に関する彼の解釈は完全に間違っています。そうです、私はそれをナンセンスだと思います。

《問 五》 CBAの幹部たちは〝黒衣の人間（メンインブラック）〟すなわちまじめなUFO研究グループを妨害しようとしている〝悪〟の存在を信じ、それらがオリオン星座に涙を発するものであると云っています。あなたもそう信じますか？

《答》 否（ノウ）！ 私は〝黒衣の人間（メンインブラック）〟がオリオン星座から涙を発しているとは思いません。あまりに大きな噂がこの特殊な出来事に与えられつつあると私は思いますが、正直に感ずるところ、これは宇宙飛行についての興味をそらさせようとして人々の心に恐怖をうえつけたがっているこの世界の調査者たちであると思います。人々がとりあわなければこの問題は自然に消滅するでしょう。この種の出来事が起ってからすでに数年がたっていると思います。

《問 六》 CBAの会員たちは宇宙人の宇宙船の名称が太陽語（註、宇宙人の言語と云われているもの）で〝ヴェントラ〟と呼ばれるのであると信じています。あなたはアダムスキからそのことを聞いたことがありますか？

《答》 この種の愚かしい言語や〝ヴェントラ〟という名称は心霊や霊媒から発したものです。宇宙の旅行者はこのような言語や名称を用いません。私はこの点を確証してもらいました。

《問 七》 ラインホールド・O・シュミット、ハワード・メンジール、そしてスタンフォード兄弟についてあなたはどう思いますか？ 特にシュミットが円盤でエジプトへ旅行した物語とメンジールの〝土星の音楽〟については？

《答》 私はスタンフォード兄弟が一機の宇宙船を見たと主張していることだけを信じます。しかし無数の人々がそれを目撃しているのですから、別に異常なことではありません。お尋ねの他の二人については私は全然支持することはできません。彼らの物語のただの一片をも私は全く信じておりません。

《問 八》 松村氏が主張している宇宙人情報によればきわめて近い未来に地球の急激な傾斜が起り、世界の人口の殆どが死滅するということになっています。それでCBAでは会員と家族を或る一定の場所にひそかに集める計画をしており、そこで大気圏外から来る大宇宙船が着陸して皆を救出することになっています。これは真実のことであると思いますか？

《答》 私の意見では否です！ アダムスキがこれまでに知り得て私に語ってくれたすべてから考えますと、進歩した精密装置をもつ宇宙人でさえも自然の出来事の発生する時や場所を予告することは不可能なのです。彼らは、何かが起ろうとしているのではないかと危ぶむかもしれませんし、その性質を臆測するかもしれませんが、〝時〟と〝所〟を予告することはできないのです。

《問 九》 アダムスキは自分自身の完全なテレパシ

ーの能力をもっているのですか？　私は彼の著書である〝精神感応（テレパシー）〟を非常に価値のあるものだと思っていますが、しかしそのなかに述べてある練習を実行するにはあまりに困難です。この書によってテレパシーの能力を得ることに成功した人がいますか？

《答》　私の知る限りでは、どこの誰でも完全なテレパシーの能力をもつ人はいません。宇宙の兄弟たちでさえも失敗をすることがあるとアダムスキに語っています。彼の著書〝精神感応（テレパシー）〟に出ている練習法については、それは実際にはむつかしくはなく、ただ練習にあたって忍耐と不屈さとを要するだけです。結局、私たちの殆どはこの二つの面に練習を必要とするのではないでしょうか。そして私たちは新しい努力を始める場合、一粒の種子から木が生長するのを期待するよりもはるかに急いで結果を期待しがちになります。しかしそのことをちょっと考えてみれば、この二つのあいだにさほどの相違はないのです。

《問一〇》　あなたは日本へ来るつもりでいますか？もし来るのならば、この町に滞在中のことは私が心配しましょう。

《答》　日本へ行きたいのですが、それには多くの費用がかかりますし、それを私はもっていません。しかし私はできるだけ金をためるつもりですし、充分にできれば必ず旅行をしましょう。世界の各国を訪ねることほど楽しいことはありませんし、特に長いあいだ一緒に働いてきた誠実な友達に会うのは尚更です。ご親切を有難う。〝父〟の豊かさが私をあなたの美しい国へ行かせるほどに充分に私へ注ぎかけられるとき、ご親切を受け入れることを楽しみにして待ちましょう。（註、以上で質疑応答は終る）

（ルーシーの付記）

あなたから去っていった人々（註、アダムスキを信じなくなった人々）についてはどうぞ心配しないで下さい。世界は大きく混乱し始めて、これまでになかったほどの変化が急速になされつつあります。人間は同じものでもって他に報いています（註、善には善を、悪には悪を）。

あなたが理解をするとき、あなたは悩むことはありません。〝無限者〟の愛のなかでは、如何なる人間が企て得るよりもはるかに賢明にあらゆる物事が働き出すでしょう。（―中略―）しかし現在のところ私が云いたいことは、松村氏が知的でまじめな人であるというあなたの意見に同感ですが、しかし何者かが彼にたいしてきわめて残酷な欺瞞（トリック）をしかけているように思われます。私は彼が真実の宇宙旅行者たちに会って、肉体的に宇宙旅行をしたという感じがどうしてもしてません。彼は一種の夢（ドリーム）の状態でこのような体験をしたのかもしれません。彼はどれくらいのあいだ宇宙旅行に出ていたのですか？　そして彼の体験を友人たちは確証しましたか？

私は誰もがそうであるように私自身の印象を述べたにすぎないのですから、そのことをご銘記下さい』

×　　×

右のルーシーの手紙の〝中略〟の部分には、CBAのコンタクトについてもっと詳細を知らせてくれればもう少しよい回答ができるであろうと述べて、逆に私宛に質問がしてありますが、私はそれにたいしてべつに返事を出しませんでした。あれこれと考えながら日を送っているうちに、八月二十八日付の航空書簡でアダムスキから私宛に質問の回答が寄せられて、そのなかに次のような個所があったからです。

×　　×

『そして私は彼が（註、松村氏が）コンタクトマンでないことをはっきりと知っています。あれは彼の心のなかで作り上げられたことです。宇宙人（ブラザーズ）がそのことを私に話してくれました。――後略』

×　　×

これは一つの資料として掲げたにすぎないのでありますから、そのつもりでご検討下さい。CBAIX撃の材料ではありません。

さて、ここでウィリアムスンについて言及しておくことにしましょう。彼をわが国で最初に紹介した

のは私だろうと思います。彼の著書〝円盤は語る〟の内容を要約したものをいつでしたか〝オール読物〟に出したことがありますが、その頃は私のUFOに関する知識はきわめて乏しくて（今でもそうですが）彼の著書の内容には真憑性あるものと考えていました。もちろん彼が心霊実験用文字板（ボード）や宇宙交信機を用いたことそれ自体は事実だろうと思います。イスラエル・ノーキンの〝円盤日記〟中に交信機の写真、まで出ていたくらいですから――。しかし、その後真実のUFOと心霊的なものとの区別を少しづつ知るようになってウィリアムスンにたいする見方が変ってきました。加うるに各国と情報を交換しているうちにわかってきたのは、彼はコンタクトマンでもなんでもなく、霊界通信をUFOの分野にもち込んだりしたために、UFOの科学的研究にひどい混乱をひき起したりして、アダムスキ側や反アダムスキ側のいずれからも相手にされない人物であるらしいということです。彼の書〝宇宙語―宇宙人〟中に載っている〝足跡〟の解読を私は原書で一読して吹き出したくなったほどあまりにそれはひどいという感じがしました。つまり彼は破滅で最初に発生したあの有名な事件の六人の目撃者の一人であったことは事実のようですが、そのわずかな体験をもとにしてUFOと心霊とをごた混ぜにして大創作をやってのけた人なのだと私は思っています。それについては各国からの見解がいろいろありましたが、最もすぐれた意見は濠州ブリスベーンのロイ・ラッセル氏が今年四月六日付でよこした書簡のなかの次の一節です。

×　　×

『過去にいく度も人類は生命のなかの〝至上なる英知〟を一そうよく理解している人々から真実の指導を受けてきました。しかしそのたびごとにその知識は「誤った解釈」をされています。さもなければ人類はそれを今日受けついでいて、その法則にしたがって生きているでしょう。二千四百年前老子（ラオツ）は真理

の言葉を殆ど書き残しはしませんでしたが、彼の教えは現代の最も「わけのわからぬ」(ミスティック)宗教の一つに変じています。これはたぶんよい例であると思います。また、西欧のキリスト教は主としてパウロの書簡を土台としていますが、しかるにパウロは個人的にはイエスに会ったことはなく、それゆえに彼の書いたものはその性質においてしばしば「わけのわからぬ」ものとなっています。どうやら「誤まった解釈」をする者は真理の伝え手(ギヴァー)のあとで出て来る〝学(がく)のある人〟であるように思われます。そしてウィリアムスンが今それをやっているのです。……ほんの小さな〝真実〟という種子からふくれあがってゆく厖大な言葉と書物！今度こそ我々はその種子を失ってはならないと私は心から思っている次第です』

× ×

〝宇宙語―宇宙人〟を訳された増野氏には実に気の毒ですが、この書は私がCBAから依頼を受けたのを増野氏に押しつけたかたちとなり、気のすまなかった氏はそれでも黙々として翻訳に励まれて内容はともかく、立派な訳業を完遂されたのですけれども、それにたいしてCBAは一銭の謝礼も一片の礼状もよこさず、ただ三冊の献本と講演会の切符を一枚よこしただけとのことですが、しかし一言の不平も云われなかった氏の態度は尊敬にあたいすると思っています。

しかしこれなどは如何にもCBA的やり方でして、「彼らも経済的に困っているから謝礼や礼状などを出さないのも無理はないのだ」といった考えは私にはあまり起りません。「彼らが何をやっているか」ということよりも「彼らが如何なる人物か」を一般会員よりも多少はよく知っているつもりの私は、右のようなやり方を「当然のことだ」と思うだけです。CBAにたいして批判的な言辞を述べる人をかたっぱしから「あいつはブラックだ！」と罵ったり、寄付金を出ししぶる人にたいしては「あんな奴には電報を送ってやらないだけのことだ！」と激しい口調

でわめいていた或る幹部の顔が浮んできます。（註、電報とは、大変災発生時の集合地を知らせる暗号電報の意）

この人は中途から幹部になってCBAを一手に指揮していた人ですが、或る肩書きをもつために皆からえらく信用されていました。しかし、いま考えますと人間というものが〝肩書き〟に如何に魅せられやすいかということを痛感する次第です。つまり誤っているのは〝肩書き〟そのものにあるのではなく、魅せられる人にあるのでしょう。かつての私もそうでしたが――。

私は現在次のように考えています。すなわち人間個々の進化とは個人の〝直感力〟の向上することを意味するのではないかと。そしてこの〝直感力〟の向上をばむものは外界にたいする〝共鳴〟なのではないかと思います。〝真実の愛〟は〝感受性〟の最高のかたちであって、これがテレパシーにつながるものであり、我々の追求すべき最終の目標であると思いますが、しかし〝共鳴〟が〝愛〟を破壊するために我々は習慣的想念という牢獄から脱出することができません。グループ、イデオロギーなどにたいする〝共鳴〟という行為が起るのは〝恐怖〟が潜在しているからであって、それは云いかえれば逃避であり、そして逃避は防禦を必要とし、防禦されるものはいつか必ず破壊されるがゆえに、さまざまの〝共鳴〟のあいだに絶えまない闘争が起るのであると考えられます。完全なる自由とはこのあらゆる〝共鳴〟が停止して自我の発見という試みを自ら起し始めた状態を意味するのではないでしょうか。そのためには一本の樹木が万象にたいして公平な態度で生きているように、人間も自然の産物としての本質に目覚めて純粋なる自我の発見への旅を始めることがすなわちグループへの〝共鳴〟以前の問題であると思うのです。〝求道〟とは要するに人間が〝自然〟との一体化に近づくための道を求めることを意味するのではないかと私は考えます。この世には人類を救う真理活動だと称する団体が如何に多いことでし

よう。そして〝共鳴〟と〝共鳴〟とが火花を散らしていますが、それはクリシュナムルティーの云うようにしょせん創造的理解力を失った、イデオロギーにたいする隷属（れいぞく）以外の何物でもありません。もちろん私自身もアダムスキやクリシュナムルティーに〝共鳴〟することは許されない筈ですが、彼らの思想に価値を認めることはできる筈です。なぜなら、アダムスキは私にたいして「自分の体験を信じてくれ」と要求したことは一度もなく、ただ「ものの考え方」を教えてくれたとしか云えませんが、ほんとうの真理の伝え手（ギヴァー）は〝思想〟そのものを伝えることはせず、それでもって〝如何に考えるべきか〟のヒントを与えるものであると私は思うからです。

大変災が発生するから宇宙船で助けてやるという約束は恐怖からのすばらしい逃避であり麻痺（まひ）剤です。そしてそれは一つの段階につなぎとめて、あらゆる自己発見と覚醒とを停止させるイカリのようなものでありまして、真実の進化した遊星人（と称されるもの）がそのようなイカリで地球人をつなぎとめようとする怪奇な伝説の意義には甚だ興味深いものがあります。

後記

◎十一月下旬にはアダムスキの親友である某夫妻が米国から来日される予定で、東京で私と会うことになっています。そのときの模様はいずれお知らせしましょう。

◎アダムスキの第三番目の著書〝空飛ぶ円盤の訣別（フライングソサーでフェアウェル）〟はあと一週間ばかりで私の手元に到着する予定で、着き次第に翻訳にとりかかりますが、出版できるかどうかはまだわかりません。しかしできなくてもなんらかの方法で内容をお伝え致しましょう。

◎ご質問はご遠慮なくお寄せ下さい。できるかぎりのことは致します。

昭和三十六年九月二十日

島根県益田市益田古川

久保田八郎